

言語聴覚士（ST）は、ことば・きこえ・のみこみに関するリハビリテーション（以下、リハ）を専門とする職種です。2004年に医療保険、2006年に介護保険で、言語聴覚士による訪問リハの算定が認められました。

高齢化が進むなか、在宅医療における訪問リハの必要性は高まっていますが、理学療法士や作業療法士と比較して、訪問リハに携わる言語聴覚士は依然として多くはありません。言語聴覚士の専門性を十分に活かし、安全で質の高いリハ機会を提供するためには、業務の拡大や整備、さらに在宅医療に関する教育を行う必要があると考えています。

在宅医療に触れた経験から

訪問言語聴覚士へ

訪問リハに従事する言語聴覚士の活動の充実に向け、実際に訪問リハを行なっている言語聴覚士を対象にした調査を実施しました。対象は実務経験5年以上の訪問言語聴覚士6名で、彼ら／彼女らがどのような経緯を辿って訪問言語聴覚士となったのか、キャリア発達のプロセスや促進要因についてインタビューを行なっていました。

その結果、訪問リハに至るプロセスの特徴として、「家族の疾病などにより言語聴覚士を志す前から在宅医療に触れる機会があったこと」や「在宅医療を見学した経験があること」など、生活環境や経験などの要因が関与していました。それらは言語聴覚士を志すきっかけにも

なっていました。

病院より「近い」からこそ やりがいがある

言語聴覚士の活躍の場は、医療・福祉・教育・研究と幅広いですが、現在約2万7000人いる言語聴覚士のうち、7割が医療分野に勤務しています。国家試験に合格したあと、初めての就職先には病院を選択する場合が多く、調査対象

訪問言語聴覚士の キャリアに関する 調査を実施

医療法人八事の森 杉浦医院
訪問言語聴覚士

小島 香

者のほとんどは、病院での勤務経験のあとに転職し、キャリアを重ねるなかで訪問リハの業務についていました。

そのため「訪問リハのやりがい」についての質問では、病院での勤務経験と比較して利用者やその家族との距離感が近いことから、信頼関係の構築がしやすく、本人・家族のニーズや家庭環境に合ったサービスの提供が可能となることをあげた対象者が多く、そのこと自体が自分の

仕事に満足する要因となりました。

さらに、利用者や家族との結びつきが強くなることで、その人の死生観や倫理観を知り、関連分野に対する興味や学習意欲の芽生えにつながることも、また職場環境がライフスタイルに合っていることが、訪問リハ業務を継続する要因となっていました。

言語聴覚士にとって、急性期・回復期・施設・在宅などの多様な就業先のなかで、自分に合った内容の仕事に従事し、自分の技術・能力を生かすことは、キャリアに対する満足度を高める要因となると考えられます。

ステーションだけでなく 診療所でも

在宅医療に携わる訪問言語聴覚士の多くは、訪問看護ステーションで働いています。しかし、近年取り上げられることが増えてきたフレイルやオーラルフレイルを予防していくため、将来的には訪問リハのみでなく、地域の診療所や歯科医院に勤務することも、高齢者のコミュニケーション機会や意欲の増進、口腔機能の維持・向上への一助になるのではないのでしょうか。

私自身も、訪問言語聴覚士として診療所に勤務しています。医師に直接報告や相談ができ、セラピストとしても安心して働ける環境だと感じています。

そして、診療所での業務は、訪問リハだけではありません。医師が「言語障害や摂食嚥下障害の疑いあり」と考えた方

を評価するために、訪問診療に同行することもあります。

また、同じ診療所に勤務する管理栄養士とともに患者さんのお宅を訪問することもあります。これにより、摂食嚥下機能の評価を行なったあとすぐにご自宅のキッチンを使用して、そのときの患者さんの状況に合った食事形態の調理方法をご家族に説明することができず、多職種が所属する診療所だからこそ、すばやしい対応やより適切な対応ができると感じています。

訪問言語聴覚士がもっと 在宅現場で活躍するために

今後、在宅医療の充実を進めるうえで、訪問言語聴覚士の需要は高くなると考えられます。しかし、急性期・回復期リハでの業務と比べて、訪問リハで要求される技術・能力や業務内容に関する情報はあまりありません。養成校で言語聴覚療法を学ぶ学生や、病院に勤務する言語聴覚士にとって、在宅現場がキャリアの選択肢となるためには、訪問言語聴覚士の業務内容を明確化し、それを教育システムに組み入れる必要があると考えます。現状では、言語聴覚士の教育カリキュラムに地域医療や在宅医療に関する講義は含まれていないため、今後期待したいところです。